
Locked Emotion

松本 藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Locked Emotion

【ZPDF】

Z0890P

【作者名】

松本 藍

【あらすじ】

後々のせる長編小説の短編切り取り。
長編版もいづれはよろしくおねがいします。

今日も、橘は帰ってきていないみたい。

三日連続、家に帰ってきていない。

マンションのエントランスをくぐった時から、予感はしていたけれど。

玄関を開けた時に返つてくる声が返つてこないと理解して、私は既に慣れてしまつた虚無感に包まる。半ば諦めていたのも事実だが心を拳でえぐられたような、そんな感じもした。自分は知らないところで期待していたみたいだ。

ローファーを脱いでリビングに進む。リビングは赤く染まった夕日に染まりながら何も言わずに、片付けられなかつた朝食の皿を残した今朝の光景のまま私を迎えた。いつもだつたら橘が夕飯を作つていてるはずなのに。私は無意識に大きなため息をついた。

たしかに私に3年間世話役として同居しているとは言え、赤の他人で、25も越えた橘には彼女くらいいるだろう。

当然だ、私なんて契約の対象でしかない。私と暮らす事は彼の仕事だから、義務だから。

そう言い聞かすが胸を締め付けられるようで苦しい。この感じは昔から何度もあつた。

「すみませんお嬢、今夜は家を空けます」 橘の口から聞く度に、私は橘が女と一夜を過ごすと邪推 否、確信して橘の傍らにいるであろう女を殺したいくらい妬ましく思つた。

彼が私の傍にいるのは仕事、じゃあ彼が別の女といるのはプライベート。

割り切れたら楽なのにね。

私は鞄を椅子の上において、またため息をついた。

ため息は私しかいらないリビングにしか聞こえない。虚しく消えてい

つた。

夕日の赤が闇夜の黒に染まつても、やはり橘は帰つてこなかつた。いつも橘の料理だつた夕飯の味は、昨日今日とさうにカツチラーメンに上書きされていく。

退屈だ。自分のために料理を作るなんて。

昔作つたスペゲティは橘と食べるためになつたから樂しかつたというより、嬉しかつた。

でも橘が家を空けて初日。自分で夕食を作つたけれど、味氣ない。30分掛けて作つた料理はたつたの5分10分で食べきつてしまつ。それなら、1個100円を切るカツチラーメンでもいいかなあなんて思つたりした。3分で出来て、5分10分で食べ終わる。

なんて一人身夕食作りつて虚しいんだろう。

自分を自嘲した。

でも夕食、風呂以外の時間は本当ににもすることがない。笑っちゃうぐらいに。いつも私は橘に依存してたんだと思い知らされるようで辛かつた。

テレビをつけても退屈な番組。

学校の勉強なんて不要だつた。

ただ、橘がそばにいてくれるだけで嬉しかつた。

どうして帰つてこないのよ。

昼間まで気丈だつた心は退屈な夜に打ち砕かれていく。まるで砂の城が波に侵されていくように。

私はソファーの上で体育座りをしたような格好でうずくまつた。ながつたるい髪が顔にかかる。涙で張り付く。自分の呼氣の熱で頬が上氣する。

早く帰つてきてよ。

そのときは、怒らないから、泣かないから。

あなたがいつも私してくれるみたいに「おかえり」って笑顔

で言つてあげるから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0890p/>

Locked Emotion

2010年11月23日16時22分発行